

白松の友好一日中国交回復のシンボル

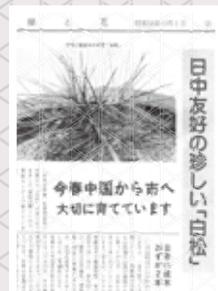
西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲昭和31年当時の松原中央公園付近の地図(松原市全図) 右に新池、左に今池が見られる。



▲白松の北側に見られる黒松群(松原中央公園) 市木を代表する松並木となっている。



▲中国からの白松育成を伝える記事(松原市緑花協会「緑と花」昭和58年10月1日,第20号)



▲松原中央公園に植えられた中国からの白松(田井城1丁目) 荒木孝氏撮影

新池跡の中央公園に植えられる緑花協会で育成された貴重木

田井城二丁目松原市文化会館、松原中央公園や松原市民体育館、読書の森(松原図書館)などが集まっています。

これらのゾーンは、江戸時代以降、多くの人々が利用した田井城村の長尾街道に面しています。昭和半ばまで、長尾街道沿いは田畑が広がり、施設が集中している場所は、新池や今池が水をたたえていました。もともと江戸時代、田井城の田畑を潤す灌漑池として、北方の集落東側の宮池や西側の西ヶ池が見られました。その後、いっそう農業用水の必要性から南接する高見村の井堰と連携しながら、新池や今池も掘られたと思われま

す。昭和五十一年(一九七六)、新池を埋め立て、翌年にかけて文化会館、中央公園、元松原図書館(現読書の森に発展)がつけられたのです。新池の池敷面積は1.65ha、水面面積は1.33ha、貯水量は2.64万m³でした。昭和三十一年(一九五六)の松原市全図に見られるように、長方形の池だと分かります。

新池の西側には、やはり長方形の今池があります。今池は池敷面積131ha、水面面積106ha、貯水量203万m³でしたが、このうち0.68haが潰廃しました。残りは田井城今池親水公園に利用され、昭和五十六年に体育館の一部、令和二年に読書の森が池を生かして水上に建てられました。

さて、新池跡の北側につくられたの

が中央公園です。グラウンドをはじめ、遊具施設や築山が造成されました。築山には数多くの樹木が植えられ、市民の憩いの場となっています。

公園が造成されて七年後、昭和五十八年(一九八三)二月、中国から松原市役所に白松が送られてきました。松といえど黒松や赤松が一般的で、わが国では白松は貴重木として珍重されています。

昭和四十七年(一九七二)の日中国交回復十周年を記念し、友好の証として日本各地に送られてきた松苗の一つでした。この白松が中央公園に植えられることになりましたが、昭和五十八年十月、松原市緑花協会発行の「緑と花」に、植え付けの苦労が、次のように書かれています。(部分省略)

「白松はどんな松かと言いますと、大変育てにくい、原産地の中国でも山西省の山間の適地でないと言っておらず、日本には成木は二本しかないといわれています。

常緑高木で雌雄同株、高さは成木で20〜30m、径0.6〜1.2m、樹形は広円錐形、樹皮は粗く樹皮に特徴があります。20年位、成育するとよく離しはじめ、青褐色になり、40年頃から汚白色大形の不斉鱗片となつてはがれ、その跡は青白色となります。この白色は、ろう質物によるものとされています。冬芽は赤褐色で枝は太く、小枝は少なく無毛、葉は三針で剛強・鋭尖・淡緑色または鋸歯が混ります。葉を裂くと良

い香気を発します。分布は中国の山西、湖北、遼西省に多く、中国では神聖な木と考えられています。

育苗センターでは、中央公園へ定着できるまで市役所から預かることになっていますが、何と言つても10年かかってやっと1mに達すると言ふ松です。苦労しています。人工的に土を弱アルカリ性にして、中国原産地に合わせて、大鉢で育成中です。九月現在、この松苗の配布を受けた他市では、半分以上枯れてしまつたとのこと。皆様にお目にかかるのは、何年、いや何十年か先のことになるかもわかりません。」

当時の大変さが読み取れます。しかし、岡田充弘さんから緑花協会の方々が苦心して土壌改良などを行い、愛情を持って育てた結果、他市ではほぼ全滅状態であった白松が、その後、本市で成育に成功したのでした。松原市は、市名から松を「市の木」に選定しており、中央公園には黒松を多く植栽してきました。「郷土の森」と名付け、市内に古くから自生している樹木も多く集めています。現在、築山の西、グラウンド際に、植栽から四十年経つて、見事に成長した白松が見られます。全国的に希少な日中国交のシンボルの白松が、市民の熱意によって中央公園でそびえたつ姿は、歴史的価値を持つもので、大切に保護しなければなりません。